

生きる術は すべ

登山家・医学博士

# 今井通子

Michiko Imai

幼いころから山好きの両親に連れられて山歩きを楽しみ、長じてのちは、女性としてヨーロッパ三大北壁への初登頂を果たすなど、輝かしい実績を持つ今井通子さん。泌尿器科の医師としても長く活躍し、後進を育ててきたが、この春めでたく大学は定年退職。自然を幅広く楽しむ活動などを通じて、人間が自然と触れ合う大切さを説き続けている。ともすれば情緒に走りがちな日本人。「科学的視野とフィールドワークの重要性」「学校教育と同じように自然から教わる機会を大切に」と語る今井さんの言葉に、今こそ耳を傾けたい。

# 自然から学んだ

## 自然から離れると人の能力は落ちていく

——現在の日本では多くの人が都会生活を送っています。地方では高齢化過疎化が進む一方で、都会、特に東京周辺に人口が集中する弊害は分かっているながら、都市の吸引力にあらがえないでいるようです。私自身都市生活者ですが、本

当に人工的に作られた人生を歩いているということをよく感じます。

今井さんは登山家として、世界の自然に触れてこられました。また医師という科学的立場でも長く活躍されています。その今井さんがご覧になった現代社会の問題点から、まず伺っていききたいと思います。

今井 国際的に見て、特にアジア諸国においては子供から大人になつていくプロセスの中で、自然から乖離している部分がどんどん大きくなっていると思います。どうもその発信源は日本ですね。今は日本より、韓国などのほうが自然

から離れている度合いが強いですが、中国も今後そうなっていくでしょう。ヨーロッパでは二〇〇年ぐらい前にそのことを経験しているので、今は自然を程よく使っていると思うのです。

アジアのように自然から離れていくとどうなっていくのか。恐らく人間の知恵、知識ではなく知恵とか思考力、耐える力、持続力などが落ちていくでしょう。頭の中でさまざまな発想が出てくる力がなくなっていく。そうなっていくさまが、世界的に見えていると思います。

文明が進むにつれ、人間がやってきたことを機械が代替してくれるようになりますね。ただ、機械はインプットしたことしかやってくれません。人間も同じように、インプットされればやるけれども文明社会で少しのことしかしななければ、それだけしかやれない状況

になっていく。しかし自然の中で暮らしていたら、多くのデータが次々にインプットされ、さらにインプットされてから動いていたのでは間に合わないことでも過去のデータを組み合わせ、新たな自然の状況に対峙するので、これもまた新しい経験（インプット）になる。そうした積み重ねによって、常にその場その場の状況判断で動いていける。そうならないと、生きていけないのです。

日本には、近代、もともとが「

## 科学技術立国なのに科学国ではない日本

——日本は科学技術が進んでいる割に、いいかげんな情報が独り歩きして、それに大勢が振り回されたりしがちですね。

今井 科学性に対する信仰は強いのですが、みんなが長屋の知識で済ませるような発想ですから、信奉するの理由が分かっているか。科学を

「一番主義」みたいなところがあります。諸国統一以降、ずっと一つのお上にみんなが従ってきたからでしょうが、ほかのものを捨ててしまふんです。落語なんかでも、長屋の大家さんに政治情勢や社会情勢を教えてもらってそれで済ませるでしょ（笑）。大本のところから情報を取る努力、多種類の考えを検証してみるということをしないで。だからうわさがうわさを呼んで風評被害も起きやすくなるんだと思います。

使いこなせていないがために、政治であれ経済であれ社会であれ、至って情緒的な行動に走ってしまう。科学者にもいますよ。一部のメカニカルが分かるとか、一部の生体分かっているだけなんだけれど、それに頼ってステレオタイプになってしまふという人間が。——経済分野の中にも現場や実



いまい・みちこ●1942年東京都出身。66年東京女子医科大学卒業。医学博士。東京女子医科大学附属病院腎臓病総合医療センター泌尿器科非常勤講師を今春退官。幼い頃から自然に親しみ、大学在学中に山岳部に入部し本格的に登山を始める。67年マッターホルン北壁登はんに成功、以降69年アイガー北壁、71年グランドジョラス北壁登はんを成功させ、女性として世界初の欧州三大北壁完登者となる。85年にはエベレスト中国側チョモランマ峰北壁に挑み、冬季世界最高到達点を記録した。現在も健康を目的とした国内外のトレッキングツアーを広めるなどその活躍は多岐にわたる。著書に『山は私の学校だった』（山と溪谷社）など多数。

体を知らないまま、借り物の理論だけでものを言う人もいます。自分で創り出し、考えることが軽んじられているところがありますね。

今井 現場を知らないで、データを借りてこざるを得ないんです。自然科学の分野でさえ、あっちの論文こっちの論文のデータをミックスし、コンピュータ上で処理して自分なりの新説を発表するのが当然という時代になりました。初めからモノを作るのではなく、これとこれを一緒にしてモノを作る、それがモノ作りなのだという人もいますからね。でも現場を知らない科学者に何が分かるでしょう。

先日、日本の南極観測・地域観測五〇年を迎えるに当たり、文部科学省と国立極地研究所がオープンフォーラムを開いたんです。そのため、宇宙飛行士の毛利衛さんと作家の立松和平さん、私とで昭和基地の視察をしてきました。私は以前から現場を知らない人間が話をするという主義だったので、このチャンスをつかひ生かしたいと考え、昭和基地を訪ねることにしたんです。

行ってみて分かったのは、昭和基地で仕事をしている人たちはみなフィールドワーカーだということでした。彼らのマインドのすごさに本当に驚かされたんです。自分たちが取ったデータがどれだけすごいかわかりませんが、データを抱きかかえるようにして、本当に可愛いという口調で話してくれます。まずそれに感動させられました。

次に驚いたのは、彼らが実地で観測しているデータから見えてくるものは、日本で語られているものとは大きな違いがある

ということでした。例えば今、世界的に地球温暖化の問題が取りざたされています。ところがデータをみると、それほど単純じゃない。南極の氷はほとんど解けているといわれていますね。しかし、南極大陸で唯一南極圏の外にある南極半島を除くと、はっきり言って温暖化は進んでいないんです。大陸の各基地、ベースキャンプが作っているデータでは、過去五〇年気温はずっと横ばいだと出ています。

——それは驚きです。

今井 だからといって安心はできませんよ(笑)。北極と南極で三〇年間CO<sub>2</sub>による温室効果ガスを計測していますが、こちらは右肩上がりなんです。これをみると、人間のメタボリックシンドロームの一因である肥満問題に似ている、ある程度バカバカ食べていてもしばらくは体重が変わらないのと同じく、南極は今まで人間がやってしまったことに対してまだ持ちこたえている段階だということなんです。また、北極のほうのCO<sub>2</sub>濃度は高くて、南極側が北極側と同数値に上るのが北極に対し二年

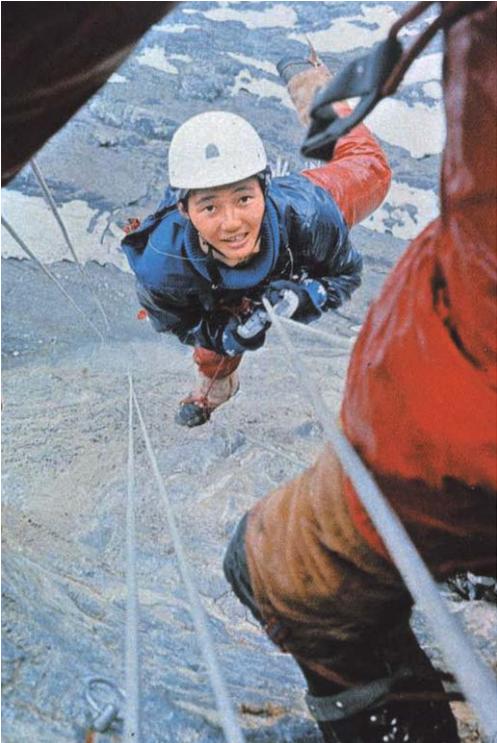
遅れです。従って、北半球の影響が二年後に南極に到達すると見てよいでしょう。

こういう議論に必要なデータは、昭和基地に毎年派遣されてきた日本のチームが地道に取り続けてきたんです。フロンガスが問題になってきているオゾンホールについても、オゾン層をずっと測っているのは日本なんです。いち早くイギリスの学者が「オゾンホール」というニックネームをつけたので、イギリスが先に発見したように思われていますが。

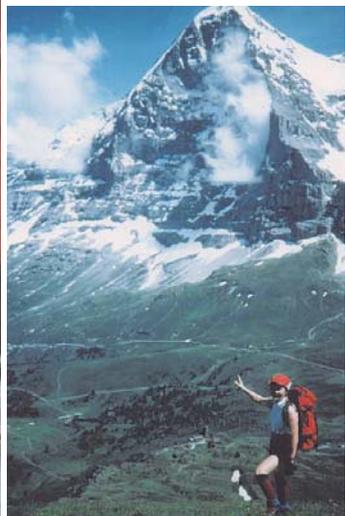
——ここでもアピールが手下だった(笑)。

今井 そうなんです。でも、大本にあるデータって、聞いていると整合性がはつきりしていて気持ちがいいですね。

私は小原流の華道の免許を頂いているのですが、水盤に花を活けるのに、遠景描写、中景描写、近景描写というのがあつて、日本は近景描写だけ。政治も経済も科学も、次に対する対処、対応だけじゃないでしょうか。でも昭和基地の人たちは違いました。遠望もしているし、中間も見ている、



1969年、アイガー北壁を登る今井さん(左)。アイガーでのハイキングツアーのひとこま(下)。(写真提供：株式会社ル・ベルソー)



## 教育問題にも科学性を取り入れるべき

近景も、左右も、後ろも見ている。そういう人たちだからデータを多角的にきちんと取り続けていたの  
で、CO<sub>2</sub>濃度にしてもオゾン層  
の厚さにしても、物が言えるデー

——お話を伺っていて、近景描写

だけなのは何も科学だけではない、教育の問題も同じではないか  
と思いました。

今井 おっしゃるとおりだと思います。いじめ問題ひとつとっても

タになっていいるのだと思います。特に自然科学については、本当の  
フィールドワーカーとしての科学  
者たちがここにいたのだと、とて  
も嬉しかったです。

よく大本が見えてこないのはフィ

ールドワークをしていない識者が  
語り、対処対応に躍起になったり、  
科学的分析もしていないからです

ね。私はラジオの人生相談をやっ  
ているのですが、先日もしじめに  
ついでの相談がありました。娘さ

んが、授業中に奇声を発する同級  
生に対して、びっくりさせようと  
脅かすいじめらしいものをしてい

たので、その子が大人になったと  
きに仕返しにくるのではないかと  
心配というのです。授業を邪魔さ

れるのが嫌だったからとはいえ、  
いじめはいけないことだと諭し、  
娘さんは脅かすのをやめました

が、今度は授業中その子が発する奇声  
を我慢するために、ストレスで自  
分の腕をかんでしまうのだと。

こういう問題を単なるいじめ問  
題と片付けていては、なんの解決

にもなりません。奇声を発してし

まう子は恐らく増え続けている発  
達障害の一種なのでしょう。その  
子は大人になってから復讐するな

んて思いもよらないはず。発  
達障害については先進国でさまざ

まな研究が行われています。科学  
的に解明し、対処していかなくれ  
ばならない問題なのです。恐らく

は、有害化学物質が脳に悪い影響  
を与えたために発生した障害だろ  
うといわれています。だけど日本

の対応は場当たり的です。悪い  
ことは何も言わないことにしよう  
というような対応で……。

この問題についてちらりとお話  
したら、時の総理大臣が早速研  
究体制を作ってくださいって、一年

後にはいわゆる発達障害者支援法  
を作られたんですが、支援法なの  
で残念ながら科学的な研究までは

進まないんです。

私が講演で訪ねたある学校では、  
ある発達障害児の子が暴れてしま  
ったときのために、落ち着かせる

ための処方薬をいつも持ち歩いて  
いるという校長先生がいらっしや  
いました。現場はそこまで「待つ  
たなし」の緊迫の度を強めている



んです。それを聞いていれば、「も  
っと勉強時間を増やしてゆとりの  
時間をなくせば勉強ができるよう  
になる」なんて悠長なことを言う  
人はいなくなると思うんですよ。  
あるいはいじめ問題だって、情緒  
的な反応に終始することもなくな  
るでしょう。医学的な発達障害の  
研究や、子供たちが異質な者を排  
斥する心理状況にある特殊な年代  
(勉強のできる子もいじめの対象に  
なるなど)であること、等々も含  
めて科学的にデータを集め、具体  
的な対策を練ることで、いじめら  
れている子も、いじめている子も  
もったきちんとした適切な「場」  
が与えられるかもしれません。

## 学校教育と自然からの教育が必要

—— 奇麗事で済まそうという発想が社会に蔓延まんえんしていることは、私も実感しています。

今井 自然の中に入っていけば、そういうことでは済まなくなってくるんです。人間は生まれたとき目は見えませんが、動けないから見えなくてしょうがない。だいたい最初は聞こえないと困りますから最初から聞こえるようになっていく。自然界というのはものすごくシステムチックなんです。目が見えるようになると、はったり、立ったり、歩いたりするようになっていく。そして、動物だから食べものを探す。餌の目のごみを食べちゃったりするでしょう。採取しているんですよ。

また、小さい子供はちよこまか動きが速いですね。あれも危険から逃れるために速くなっているんです。それを「危ないからだめよ」なんて言っていたら……。思いっきり走らせたり、ころんだりさせて、何度も練習させて、いろんなパターンの中でも絶対立って歩け

るように育てるのが親の役目なんです。それを省略してしまつて

相手の命を奪って生き残るのが動物ですね。だから次は相手と戦うとか、命をとることもありますよ。サル学の河合雅雄先生は、蛙のお尻にストローを突っ込んでプーッと膨らませてパンと割ると、それを五〇回ぐらいやってみると、初めて「ああ、命って大切なんだ」と気づくとおっしゃっています。ところが三、四歳の子供のうちに「お花きれいな、採っちゃいけません」「かわいそうだから、いじめちゃいけません」と言われてしまつと、動物として発達する以前に知識だけがかぶさるんですから、子どもがバランスよく育つわけにはいきません。

—— 自分で気づくのではなく、上から知識を与えられてしまつて、今井 というところから、もう既に科学者の話を全然聴かない国なんです。本当のフィールドワークをした科学者の話を聴かない。科学技術立国かもしれないけれど、

科学国ではない。情緒だけで物事が動いていく。やはり、自分で体験して感じ取ることに帰らなければいけないと思います。そこから疑問・不思議を解明する科学は生まれますよね。

—— 今井さんはさまざまな自然の活動を行うクラブ・ベルソウを運営しているらしいですね。今井 ここでは山登りだけじゃなく、バード・ウォッチングやフラワー・ウォッチング、乗馬、ウォーターラフティング、カヌーやヤックなどなんでもやるんです。なおかつ畑も田んぼも、森の作業もやる。男性がやるかどうかは縦割りになるんですが(笑)。いろいろなことをやるから学べるこ

とって多いですね。基本的には人間が学べるものは自然なんです。学校や職場で勉強したことと自然から教わったこと、その両方がないといけない。そうでないとアイデアも貧しくなってしまうんですよ。ですから仕事からリタイアする前に、自然に触れる機会を持つておけばいいと思います。男性は概して仕事人間で、自然に触れる機会が少ないので、

すよね。情報も職場や本から得るものが中心です。だからリタイア後、情報が入らなくなること恐れる。その点、女性たちは常々実際にいろいろなアンテナを持って人付き合いも広がっていくし、情報も入手しています。複数の場に参加することで、さらに豊かな情報を手にしているのです。その上で自分の生き方を自信を持って選んでいる。それが、ゴーイング・マイ・ウェイにみえるのかもしれないが(笑)。

—— 二兎を追う者は一兎をも得ずと言いますが、それはもう違うんですね。

今井 二兎を追うことで、視野をもっと広げられるんですよ。—— 本日はどうもありがとうございました。

聞き手/日本銀行前情報サービス局長 湯本崇雄

